

國學院大學栃木短期大学
日本文化研究 第5号 抜刷
令和三年二月二十八日 発行

〈學術論文〉

『奥細道菅菰抄』と漢詩文 (一)

塚越義幸

『奥細道菅菰抄』と漢詩文（一）

塚越義幸

一、はじめに

『おくのほそ道』の本文中の冒頭、松島、平泉、象潟などの章に漢詩文が引用されていることは、今更言うまでもないが、その典拠に関しては注釈によって多少の差異がある。『おくのほそ道』の注釈で現存最古のものとは、『おくのほそ道鈔』（宝暦九年序）であるが、その中では七十八箇所にわたって漢詩文が引用されて

おり、かつてその実態を調査したことがある。^{〔1〕}ここでは、『論語』を筆頭に『杜律集解』・『孟子』・『字彙』・『莊子』・『文選』・『白氏文集』・『詩経』・『古文真宝後集』・『唐詩選』・『左伝』・『中庸』・『老子』・『書経』・『大学』・『大明一統志』など（書名の順は、引用の回数が多いもの順による）が引用されていた。

しかし、『おくのほそ道鈔』は稿本のままであり、

どこまで流布していたのか、実情は掴みにくい。版本としての本格的な注釈は『奥細道菅菰抄』(安永七年刊)を待たねばならない。今回は、版本として流布していた『奥細道菅菰抄』に引用された漢詩文について列挙し、それらがどのように注解の役割を果たしていたかを考察してみたい。その際、『おくのほそ道鈔』との比較も試みてみたい。

二、『奥細道菅菰抄』と注釈者梨一

『奥細道菅菰抄』は『俳文学大辞典』(角川書店)では、俳諧注釈書。半一。梨一著。安永七(一七七八)・八、江戸山崎金兵衛ほか三軒刊。青崑山樵序。応堂上人序。蝶夢跋。『おくのほそ道』の注釈としては『おくのほそ道鈔』に次いで古く、版本としては最初のもの。注釈は詳細で、重要な参考資料。巻初に「芭蕉翁伝」を配する。

とあり、書誌的解題の後、「注釈は詳細で重要な参考資料」との解説がある。『大阪青山短期大学所蔵本テキストシリーズ 奥細道菅菰抄』の解説では、梨一の序文や蝶夢の跋文、および凡例の内容を踏まえ、

若い頃より芭蕉を尊敬し、『おくのほそ道』の注釈書をと心がけていた梨一は、四十歳に到るまでに公務の都合上、『おくのほそ道』ゆかりの地に实地踏査することができた。その時の感慨が忘れられず、丸岡に隠棲してからの十年余りの間に注釈を完成させるに至ったという。なお上巻の部分は一先に草するものは、いにし年、越中富山の俳夫直生といふものに奪はれ」たため再び起稿するなどの苦心談もあったと記されている。

『奥細道菅菰抄』以後の『おくのほそ道』注釈書で、本書に拠らないものはないといわれるほど、梨一の功績はあまりにも偉大である。同書に寄せた梨一の友人であり芭蕉研究者として名高い蝶夢も跋文には、本書が实地踏査と博引傍証によるすばらしい注釈書であると絶賛している。なお本書の題名は『おくのほそ道』本文の「おくの細道の山際」に十符の菅有。今も年々十符の菅菰を調べて国守に献ずと云り」の箇所にも拠っていることは言うまでもない。

とあり、本書の重要性、特に後世への影響力、また

著者梨一の功績の偉大さを、蝶夢の跋文により実施踏査と博引傍証の立場から説いている。⁽²⁾

また、『勉誠社文庫122奥細道菅菰抄』（勉誠社一九八四年）の解説では、

その注釈は、時に穿鑿に落ち入り牽強に流れた跡がないでもないが、全般的に詳細精密であつて、『ほそ道』注釈の基礎は本書によつて築かれたと言つても過言ではない。

とあり、注釈の牽強付会な面を肯定しつつも、注釈の基本的存在を認めている。

さらに、『奥の細道古註集成』（笠間書院 二〇〇一年）の諸本解説では、

俳人の伝記を紹介したり、『おくのほそ道』の序文の位置を明確にしたりしている点も評価される。『おくのほそ道鈔』の影響を受けている引用もある。

とあり、序文の位置の確定についてや、『おくのほそ道鈔』との関わりも特色として取り上げられていることが示されている。実際、序文の位置の他、段落ごとに「の段」のように示してあるが、それも特質とす

べきかと思われる。

以上のような解説からも、本書は『おくのほそ道』の版本としての注釈の嚆矢で、注釈も詳細で段落分けも有り、梨一の功績は大きかったことが窺えるが、果たして漢詩文の受容に対しては、どのようなことが言えるであろうか。

次に著者梨一であるが、『俳文学大辞典』では、

俳諧作者。正徳四（一七一四）～天明三（一七八三）・四・一八、七〇歳。本名、一祚（ひとつき）一紹・高橋とも）・干啓（収蔵とも）。別号、蓑笠庵・香椿亭。江戸の人。柳居門。代官所役人で、最終任地は越前国兵庫村代官所。宝暦一二年（一七六二）ごろ、同代官所閉鎖後は同国丸岡に隠棲。その二年前ころから諸撰集への入集数が多くなる（それ以前は柳居追善『三景集』に一句のみ）。丸岡で俳諧指導の傍ら、加賀の關吏・既白、京都の蝶夢らと交流し、俳論の執筆も開始、蕉風復興運動に寄与した。墓所は丸岡台雲寺。編者、紀行『大和めぐり』（稿本）『吾妻笠』（稿本）『吾妻笠附録』、俳論『もとの清水』、注釈書『奥細道

菅菰抄』『奥細道菅菰抄附録』『芭蕉翁発句解書』とあり、江戸の人、柳居門、代官所の役人、越前丸岡隠棲後の俳諧指導、關更や蝶夢らとの交流（蝶夢は『奥細道菅菰抄』の跋文を著している）、そして蕉風復興運動に寄与するなどの活動を行っていたことがわかる。なお、梨一の逸話については、『続近世畸人伝』（寛政十年）巻之二「一祚梨一」に、

一祚梨一は江戸の人也。性廉にして家乏しく、書のみ多し。凡ソ世の人事を省、外の聞見をいとはず、隠操ある人なり。越前丸岡侯聞し召て、使者をつかはされけれど、固辞してうけず。使者謀りていふ、一つのあばらや有り、それをたまふべし。又何程の禄を充行るべし。しかれどもかかつて勤仕の労をおほせず。たゞ今迄の姿にてあらしむべしとの御事也と。こゝにして丸岡に下りぬ。もとより儒者に用給ふ御心なれば折々はもの問給ふことあり。しかれども一度も出仕といふことはなく五年過しければ、今はとて侯、梨一に儒書の講談を命じ給ふ。おのれも幾とせか恩を蒙りしことなれば辞するに不_レ忍_ビ、命に応ぜんとす。されど脇

ざしのみにて刀は今になし。いかゞせんといふ。それこそ安きこと、て、其使者の士より佩刀を贈りけり。不_レ羈にして洒落なることすべて此類なり。かゝる意より俳諧を好みて人にもしらる。もとの水といふ著書あり。又ばせをの奥の細道を註したるもあり。俳諧にて交りし洛の蝶夢法師、伊賀の桐雨といへると、もに、梨一が所をとひしことありしに、丸岡のそこくゝと聞て其あたりに行しが、家もまばらにて、人にとふべくもあらぬ所に、築地の崩れて、犬の通ふ穴明し家有、其穴より覗みれば、庭はえもしれぬ草木繁りて、人げもありやなしやおもふばかりなるに、俵物など多く積たれば、是さだめて梨一が家なるべしと、つと入て案内を乞しに、はたしてそなりけり。一時越前の兵庫といふ所の代官になり、開田云、出動だにもせぬ人の代官になりとはいふかし。あるひは止事をえぬことありてばらく君命に應じけるにや、たづぬべし。秋収を聞ことありしが、其正直無欲なることを百姓大きに感じて、梨一明神と唱へて、其真影を崇、秋ごとには祭れりとぞ。⁽³⁾

傍線は筆者による。以下同様。

とあり、丸岡における致仕をめぐるいきさつ、儒者としての講師への対応、蝶夢と桐雨の訪問時の状況など、彼の清廉にして朴訥、洒脱、質素な生活ぶりが記されている。もちろん彼の業績である『おくのほそ道』の注釈についても触れられている。そして正直無欲な梨一が、周りから明神と称されていたことも彼の人柄をよく表していると思われる。

三、『奥細道菅菰抄』と漢詩文

次に、『奥細道菅菰抄』（以下『菅菰抄』）における漢詩文に対する姿勢を取り上げてみたい。まず、梨一の本書の注釈についての取り組み方については、「凡例」で、

此書に註する所、たゞ故事・古言等の品々のみを挙て、文章句義をくわしく述べざるは、俳聖の祖翁と、未練なる我と、風雅に宵壤のたがひ有を恐る、故なり。されど、文法などの事につきては、此道を学ぶ人のたつき共ならんものは、ひそかにこれを記すことあり。⁽⁴⁾

と述べ、注釈に当たって、故事や古言を用例のみあげ

詳細を述べなかつたとしており、その理由として、俳聖芭蕉と傍線部「風雅に宵壤（天地）のたがひ有るを恐るる」ためだとしている。しかし、俳諧道を学ぶ者の役に立つものは、ひそかに文法解釈を添えたことも記されている。

蝶夢の跋文には、

菅菰抄いできて後、そのおくに物書そへよといふに、思ふことあり。不読万卷書、不行千里区、無解少陵之詩、と実も奥の細道のおくふかき、いろはもじのやすらかなれば、牛追わらべも分入べきやうながら、意味の深長なるは、筆かむ老人たりとも踏みまよふべき。しかるに注者の何がし、はやくより此道に心をよせて、奉公のつゐでに海山のふるき跡を見めぐり、聞書のみぎりに和漢の古き語のよりどころあるを書きつくるま、つゝにこの抄となりぬと。かく万卷の文をよみ千里の旅をせしこの人ならで、いかで細道のかすかなるを尋しるべきや。しかれば、居ながら名所をしれりと。おこにたのみたる。大かたのすき人達、相かまへて、よのつねのおもひしてよむ事なかれ、

と書きつくるものはな。

とあり、『おくのほそ道』を繙くと、万巻の書を読まず、千里を訪ねず、傍線部「少陵の詩を解することが無い」と、その意味の深さを正しく理解することは不可能であるとしている。特にここでは、具体的に杜甫の詩を読解することが不可欠であることが示されている。そして、梨一が奉公のついでに『おくのほそ道』の旅の跡をめぐり、傍線部「聞き書きの折に、和漢の故事・古言の典拠となるべきものを書きつけながら、この『菅菰抄』が完成した」ことにも言及している。とすると、梨一の序文の「故事・古言」は、やはり和漢双方のものであると判明する。

『菅菰抄』には珍しく引用書目が提示されている。延べ百二十三書目が挙げられているが、そのうち漢籍は約半数の以下の五十五書目になる。

老子經 莊子 書經 詩經 易經 大學
 學(朱子序) 周禮 論語 荀子 孟子
 孔子家語 韓非子 春秋左氏傳 國語
 吳越春秋 史記 前漢書 晉書 爾雅
 說文 劉熙釋名 玉篇 字彙 正字通

書言故事 尺牘雙魚 六帖 楚辭 文選
 杜詩全集 唐詩選 三體詩 白氏文集
 古文前集 同後集 陸璣詩疏 圓機
 活法 山海經 神異經 博物志 淮南子
 列仙傳 白虎通 風俗通 西京雜記
 桃源記 枕中記 世說新語補 本草綱目
 五雜組 太平廣記 四部稿 熙朝樂事
 類書纂要

これらは四書五經をはじめ經史子集、万遍なく挙げられていることがわかる。ちなみに『おくのほそ道鈔』では、『論語』・『杜律』(『杜律集解』か)・『孟子』・『字彙』・『莊子』・『文選』・『白氏文集』・『詩經』・『古文真宝後集』・『唐詩選』・『左伝』・『中庸』・『老子』・『書經』・『大学』・『大明一統志』・『礼記』・『列子』・『淮南子』・『四書大全』・『吳越春秋』・『晋書』・『搜神記』・『山海經』・『博物誌』・『述異記』・『海内十洲記』・『遊仙窟』・『世説』(『世説新語補』か)・『唐文粹』・『統文章規範』・『事文類聚』・『爾雅』・『礼部韻略』・『古今韻会举要』・『本朝文粹』(回数が多い順)の三十六書目が引用されていたが(二書に共通するものは二十書目)、『菅菰抄』の五十五書目という

数には及ばない数字であることがわかる。また現在判明している芭蕉俳諧に影響を与えた漢詩文として挙げられている『易経』・『論語』・『孟子』・『中庸』・『老子』・『莊子』・『列子』・『小学』・『詩経』・『文選』・『三体詩』・『詩人玉屑』・『錦繡段』・『古文真宝』・『詩林広記』・『水川詩式』・『聯珠詩格』・『千家詩』・『円機活法』・『蒙求』・『書言故事大全』・『古今類書纂要』・『杜律集解』・『李杜絶句』・『白氏文集』・『東坡先生詩』・『山谷詩集』・『五車韻瑞』・『禪林句集』・『梅花無尺感』・『和漢朗詠集』・『詩法授幼抄』の三十二書目⁵⁾と比べてもその多さには驚かされる。

梨一は『菅菰抄』の付録として『奥細道付録菅菰後考全』(以下『附録』)を執筆しているが、そのの「文章論」では、

凡文章に和漢の二つありて、漢に雅俗のわかち有。倭に和歌・連俳のたがひありて、それが中にもいとたやすからぬは、ひとり俳諧の文にとどまりぬ。いかに(と)いふに、漢文はもろこしの詞のみなれば、よくもあしくも紛るべきに非ず。和歌・連歌の文は、ことに優美をむねとして、かりにも俗

態鄙語を用る事なし。我が俳諧の文に至ては、漢語をあつかひ、鄙詞をたち入て、雅俗貴賤をゑらぶ事なきゆへに、硬きときは、四書の俚諺抄をよむがごとく、ぬめり過れば、なめくじりの垣根を這まはりて、終に源氏・伊勢の似せものと成もやすらむ。故に諸文のうちにおゐてひとり俳文を難しとすべき歟。⁶⁾

とあり、文章に和漢の二つがあり、俳文というのは厄介なものであるとし、漢文は傍線部「中国のことばのみなので、つまり漢字なので、良くも悪くも文体に紛れる要素はない」とし、一方「自分の俳文は、漢語を扱いながらも俗語も交え、雅俗貴賤を特定することはしない」とする。その結果、文章が硬いときは四書の俚諺抄のようだと述べている。

また同論では、

祖翁の文章ハ、もとより和漢の雅言より出でて、それに俳諧の風流をまじへ玉へば、此細道的一篇など打見には安らかにして、七歳のわらべの耳のいも入りながら、其の意の微妙に至てハ、八十の老翁も是をよく得る事かたし。

と芭蕉の文章にも言及している。和漢の雅言に俳諧の風流(俗世界と捉えているか)を交えており、それが『おくのほそ道』の文意の微妙さを生み出しているといっている。

さらに同論の最後には、『おくのほそ道』の冒頭から千住の旅立ちまでを本文のみ漢訳している。

猶祖翁の文章のよく雅に通じたるを、蓮二房出て後、終に俗に墮せるの語を今つまびらかにせんとならバ、細道の文章を漢語にあらためて試るに、譬へば、

日月ハ者百代ノ之過客ニシテ而四時モ亦一歳之征夫ナリ也、

舟子ノ泊ニ於水上ニ馬夫ノ老ニ於路頭一、何レノ日カ非レ客ニ、何レノ居カ非レ旅ニ、

古人有リ多ク死スル於客中ニ者上焉、余モ亦自リ嘗テ有リ孤雲逐レ吹之志ニ而降、

漂ニ泊シテ山野江海ニ而不レ已マ矣、客秋則還リ東都ノ敝廬ニ、

拂ニ蜘蛛網一、拭ニ塵埃一、而休ニ此ニ於霜雪一矣、而翼早春適々望ニ薄霞ノ之愛速一、

倏忽トシテ思レ為ニ河關外ノ客一、率尔タルコト如レ狂スルガ、似ト爲ニ岐神ノ所レ召サ者上ト也

於レ是乎補レ袴ヲ修メ笠ヲ灸シメ焉、箴シ焉、而後ニ掛ニ念スルコト松島ノ之月、象潟之雨一也、

愈ク急ナリ矣、終ニ轉レ居ヲ寓ニ杉風之別墅ニ、既ニシテ而貼ニ八句ノ詞ヲ於壁上ニ、

而三月二十七日、首メテ上ル途ニ、天未レ明ケ月光既ニ没ス、而中霄猶ヲ朦朧ヲリ、

少ラクシテ焉則霽ル矣、而遠ク望メバ富峰ノ之凌レ雲ヲ而眈然タル、

邇ク顧レバ東叡感應ノ之櫻花不リキ意ハ、奈ニ之ノ別離一何、夜來輻輳スル之汝爾、同シテ舟ヲ送レ之ヲ、

到ニ千住驛ニ而訣別ス矣、前途三千里、相思迫ニ藁籥ニ別淚沾ニ袖袂一

蓮二房(支考)が出現して以来、芭蕉翁の雅に精通した文章を俗に失墜せしめてしまったことにより、この漢訳を試みたと述べると、その一例として漢訳を示した。それぞれ本文に忠実にしかも雅の世界をも表現した見事な漢訳と言えらると思うが、特に冒頭では「過客」と「征夫」など和漢の対を巧妙に訳出していると

思われる。この後に梨一は、

もとより此漢文は童蒙のよみ安からん為に、細道の詞をたゞちにづりて、ひたすらの注色を加え侍らねバ、其味ひなきに似たれど、それハ予が線(浅)才のあやまちにして、祖翁の詞に咎にハあらず。されば予がつたなき筆にさえかくバかりには物され侍るを、ましてやハ馬遷が觚をとり班固が毫を含て、是を修飾し侍るとならば、何ほどの名文にも成なんかし。蓮二房以来其響に效_フ輩の文章に、一行たりとも漢語にうつし綴らるべきものありや。是をもて、祖翁の文のよく漢脉に融通して高峻なるをしるべきのミ。蓑笠庵主人述

と続け、初心者に読み易いように『おくのほそ道』の本文を漢訳したとあり、司馬遷や班固のごとき中国の歴史家の文飾を施したら名文に成るだろうと述べている。そして蓮二房(支考)以来の「響に效う輩の文章」(仮名詩推進を指すか)への批判とも取れる俳文における漢語表出の重要性を解き、改めて芭蕉の漢詩文の文脈に精通した俳文の高尚さを感得すべきことを強調した。

以上、梨一が『菅菰抄』を著すに当たって、漢詩文をどう扱っていたかを探ってみたが、先ず引用書目を見てみると、漢籍の引用書目の数には圧倒されるが、その数は和書の数(六十八書目)と比較すれば必ずしも多くはなく漢籍に偏っていたとは言えない。むしろ和書と漢籍のバランスを取っていたと考えて良いのではないだろうか。『附録』の「文章論」における俳文論や蝶夢の跋文に見える梨一が和漢の故事に由来する事項を聞き書きしていた記事からも、そのことが明確になるであろう。さらに『おくのほそ道』本文の漢訳を通じて、特に芭蕉の俳文における巧妙な漢脉の融通性を高く評価しており、『おくのほそ道』の解釈における漢詩文の重要性を解いていると思われる。

四、『奥細道菅菰抄』の注釈と漢詩文とのかわり

次に、具体的に『菅菰抄』に引用されている漢詩文を注釈順に挙げ、それぞれどのような注解として反映されているかを考察してみたい。なお本注釈は『おくのほそ道』の本文の該当する箇所のみを挙げるだけであり、本稿もそれに倣った。

(一) 月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也(一)

古文後集、春夜宴ニ桃李園一序ニ、夫レ天地ハ者萬物、

之逆旅、光陰ハ者百代ノ之過客、ト天地ノ運旋、

日月ノ行動ヲ旅ニ喩フ。逆旅ハハタゴヤ、光陰ハ

日影ノウツリ行ツ。過客ハ旅人ヲ云ナリ

ここでは、現在では揺るぎない典拠とされる李白の「春夜宴桃李園序」が『古文真宝後集』（引用書目にある）を出典として挙げられており、該当箇所が引用されている。さらに天地や日月の運行を旅に喩えている点、「逆旅」が旅籠、「光陰」が月日の移りゆくこと、「過客」が旅人であるとの注釈を加えている。『魁本大字諸儒箋解古文真寶後集』の注では、

天地ハ如シ客舎一

月日ハ如シ流行過客一也(8)

また『古文真寶後集諺解大成』（鶴飼石齋 寛文三年）

では、その注をさらに、

天地一客舎モ。旅宿也。云心ハ。天地ハ一年一

年ニ、萬物ヲ送り迎へテ入宿スル程ニ。天地ハ。

萬物ノ爲ニハ。旅屋也。光陰一光陰ハ。日月ノ

ヒカリカゲ也。百代一ハ。天地開闢シテ。日月星

辰出現スルヨリ。永劫千万世迄ヲ指云。過客一ハ。

旅人也。

月日一云心ハ。日月流行シテ。千萬歳ノ間。四

季晝夜。チャツくト替り過ルハ。人ノ客舎ニ移

リ易ル様也トゾ。

と解釈している。梨一がどこまで『古文真宝後集』の注を読んでいたかは不明であるが、『古文真寶後集諺解大成』では、漢籍としての『魁本大字諸儒箋解古文真寶後集』の本文および注をさらに詳細に注解を加えており、参考にしていた可能性はある。『菅菰抄』の「天地ノ運旋日月ノ行動ヲ旅ニ喩」という注釈が、石齋の施した注解の「天地開闢シテ。日月星辰出現スルヨリ。永劫千万世迄ヲ指云」や「日月流行シテ。千萬歳ノ間。四季晝夜。チャツくト替り過ルハ。人ノ客舎ニ移り易ル様也トゾ」などに根拠を得ていたとしても不思議ではない。また「逆旅ハハタゴ」や「過客ハ旅人」も石齋の「旅屋」や「旅人」に対応している。とすると『古文真宝』を介在として芭蕉の『おくのほそ道』の冒頭の旅観を解説した梨一の注解は妥当性があ

ると思われる。

ここは『おくのほそ道鈔』（以下『鈔』とする）では、同箇所の注釈として、

夫^レ天地^ハ者萬物^ノ之逆旅^{ナリ}光陰^ハ者百代^ノ之過

客^{ナリト}春夜^ニ宴^{スル}桃李園^ニ序 李太白

唐文粹及續文章軌範事文類聚前集古文後集

載^ス之^ラとかや

或曰光陰とハ日月の異名と

行かふ年もと註し添えたるにや

とあり、前半の漢文調の「月日は百代の過客にして」の典拠として、梨一と同様李白の「春夜宴桃李園序」が挙げられているが、出典として『古文真宝後集』以外に『唐文粹』や『続文章規範』・『事文類聚』などの複数の出典が明記されている。ただ「光陰」と「月日」の関係は示されているが、「過客」が「旅人」であるとの注釈は見られない。『菅菰抄』と『鈔』との関わりは不明であるが、梨一は「春夜宴桃李園序」の出典を『古文真宝後集』に限定しており、「日月の運行を旅に喩え」たり、「過客」を「旅人」と解釈したりしており、今もそれは踏襲されている。現在の冒頭の解

釈は、例えば、

尾形仿『おくのほそ道評釈』（角川書店 平成十三年）では、

月や日は永遠にとどまることのない旅を続ける旅客であり、この人生を刻む来ては去って去つては来る年もまた同じく旅人である。

となっており、「過客」を「旅客」とし、佐藤勝明『全文を読み切る「奥の細道」の豊かな世界』（大垣市教育委員会 平成三十年）の解説では、

「百代」はとても長い時代、「過客」は来訪者や旅人を意味し、「百代の過客」で永遠の旅人といった意味になる。その主題にあたるのが「月日」。その下に「年」とあり、対句形式になっているので、この「月日」は「年」と合わせて年月日を表し、要は時間のことであつたと了解される。時間は永遠に旅を続けている、ということをも、「月日は」と「年も」に分けて、対句形式で表現していたわけである。

となっており、『菅菰抄』の注釈は、現在の注釈の基本をなしていることがわかる。(9)

(二) 舟の上に生涯をうかべ

生涯ハ俗ノ一生ト云ガ如シ。莊子ニ、吾カ生ヤ也有リ
涯リ

ここでは、「生涯」の典故として『莊子』養生主第三
を挙げてゐる。該当部分は、

吾カ生ハ也有涯、而知也無涯。以有涯
隨無涯、殆已。已而爲知者殆而已
矣。(10)

となつており、「人生は有限であるが、じつくりと思
考すべきことは無限にある。有限な人生に無限な思考
をし尽くそうとすれば、そこには無理が生じて危険で
ある。それだけではなくさらに思考を深めようとすれ
ば危険がますますばかり」という意味に解せよう。ここで
は莊子は「知」に偏ることなく、じつと自己の内なる
ものを守ることの重要性を説いてゐるところである。
この注は、「生涯」は「人の一生は有限である」とい
う意味に捉えるため『莊子』のこの用例を示したと思
われる。

この注は『鈔』には採られていない。

『菅菰抄』ではその後、

古人も多く旅に死せるあり

是マデ序中發端ノ詞也

予もいづれの年よりか

是ヨリ本序也

とあり、冒頭から「古人も多く旅に死せるあり」まで
を序文の中で、その発端を飾る詞であると、そして「い
づれの年よりか」からを本格的な序とみなしている。
『鈔』には見られないが、後の『奥細道洗心抄』には『菅
菰抄』のこの部分が引用されている。以降梨一は、段
落の切れ目に段落名を付している。

(三) 片雲の風にさそはれて

詩二一片ノ孤雲逐テ吹飛フト云風情ナルベシ

ここでは、「片雲の風にさそはれて」の風情として
「二片ノ孤雲逐テ吹飛」を挙げてゐるが、これは王
令の七言絶句「孤雲」の起句で、『円機活法』（引用書
目にある）「詩学卷一 天文門 孤雲」に所収されてゐる。
ただ、ここでは王介甫（王安石）の詩としてゐる。

孤雲 一片 王介甫詩 一片ノ孤雲逐テ吹飛、東西

終日竟^ニ何^ニカ依^ン。傍人莫^レい道^一能^ク為^レスト雨^ヲ、情^ハ
恨西山採得婦。⁽¹⁾

梨一は、この詩の第一句目のみを掲出し、「ひとひらのちぎれ孤雲が風に乗って飛んで行く」風情に誘われて、予(『おくのほそ道』の主人公)が『おくのほそ道』の旅への決意を示したことの注解としたと思われる。注釈者の断章取義としての一面が窺える。なお、この詩句は前出の『附録』の漢訳にそのまま引用されている。

『鈔』では、「片雲」の用例として「杜律 落日邀^{ハカ}二雙鳥^ヲ晴天卷^ツ片雲^ヲ」(杜甫の五言律詩「秦州雜詩十四首」第十二首の頷聯)を挙げている。

(四) 海浜にさすらへ

吟行ト書ベシ是モサマヨフ^フニテ文選漁父辭ニ見
タリ左遷ヲ云ニハ非ズ

この注は、「さすらへ」の語釈として、漢字では「吟行」と当てるべきで、意味は「さまよふこと」であって「左遷」ではないとし、用例が『文選』(引用書目にある)「漁父辞」(屈原)にあると述べている。『文選傍訓大全』(明

王象乾 元禄十一年刊)卷三十三「漁父」(屈原)には、
屈原既放^{ハナタレテ}。遊^ニ於江潭^ニ。行吟^ニ澤畔^ニ。顔色
憔悴^シ。形容枯槁^{セリ}。

とある。屈原が楚国から追放されて、沢のほとりをさまよいつながら沈吟しており、その様子がすっかりやつれてしまった場面であるが、梨一の注釈に見えるように「吟」の訓として「さまよふ」を当てている。ここでは、予が屈原のように楚国を追放され失意の内にさまよっているのではなく、自らの意志で海浜をさまよいつながら吟行する旅への姿勢を読み取るべきであることを指摘していると思われる。

この注は、『鈔』には採られていない。

(五) 杉風が別墅に移るに

杉風ハ翁の門人、東都小田原町に住す。本名鯉屋
藤左衛門と云魚店なり。別墅ハ別荘ニ同ジ。俗ニ
下屋敷ト云。晉書謝安^カ傳^ニ、園^ニ菖^ヲ別墅^ニ、ト云
是ナリ。此別墅ハ東都深川六間堀と云所にありて、
祖翁蛙飛込の句を製し給ふ地也と云。其古池今猶
存す○是迄序文なり

この注は、まず杉風の経歴を述べ、その後「別墅」の意味（別荘と同じで下屋敷とも）を掲げ、その用例として『晉書』（引用書目にある）謝安伝を挙げている。その部分の前後は、

命^テ駕^ニ出^ニ山^ニ墅^ニ、親朋畢集^ル方^ニ與^レ玄圍^レ碁^ヲ賭^ニス
別墅^ヲ安常^ニ碁劣^ル於^ニ玄^ニ。⁽¹²⁾

となっており、大戦（東晋の肥水の役）の前に、謝安は山中の別荘で出兵する謝玄と棋を囲み、その別荘を賭けた。通常なら謝玄が勝つが、この日は心中穏やかならない玄が敗れたという場面になる。ただ、ここでは単なる「別墅」の用例を示したに過ぎないと思われる。

その後別墅の場所（深川の六間堀）を示し、芭蕉が「古池や」蛙飛び込む」の句を作成し、今（当時）もその古池が残っていることを明らかにしている点が興味深い。⁽¹³⁾ これらの注は後の古注が採用しているが、『洗心抄』には、同文の引用の後に、

採茶庵といへる、すなハち是也。

とあり、別墅が採茶庵であったことが示されている。

またさらにその後に、「ここまでが序文である」と

確定しているところも特出した注である。この注のすぐあとに「草の戸も住替る代ぞひなの家」の句が来るので、梨一はこの句の前までを序文とみなしたことになる。現在では、序章（発端）は一般的に「草の戸も」の句の後の「面八句を庵の柱に懸置」までとされているが、⁽¹⁴⁾ 梨一は「草の戸」の句から「面八句を庵の柱に懸置」までを「面八句をの段」と別段にみなしている。

ここでの注は、『鈔』には見られない。

(六) 草の戸も住替る代ぞひなの家

……年年歳歳花相^ヒ似^{タリ}、歳歳年年人不^レ同^{カラ}の

心ばえにて、人生の常なきを観想の喩なるべし

……

ここでは「草の戸も」の句解として、「年年歳歳花相^ヒ似^{タリ}、歳歳年年人不^レ同^{カラ}」が引用され、その詩情を含め人生の無常観を表した吟であることを示している。この二句は劉廷之の七言古詩「代悲白頭翁」（引用書目にある『唐詩選』所収、ただしこの詩は同じく引用書目にある『古文（真宝）前集』に「有所思」と

いう題名で宋之問の作として所収されている)の十一句・十二句目であるが、この二句は『和漢朗詠集』無常』に所収されており、⁽¹⁵⁾すでに人口に膾炙された成句でもあり、意味は容易に掴めるが、全句を挙げてみる。

洛陽城東桃李花

洛陽城東 桃李の花

飛來飛去落誰家

飛び来り飛ひ去て 誰が家にか落つ

洛陽女兒惜顔色

洛陽の女兒 顔色を惜しむ

行逢落花長歎息

行々落花に逢て 長歎息す

今年花落顔色改

今年 花落て顔色改る

明年花開復誰在

明年 花開て復誰か在る

已見松柏摧爲薪

已に見る 松柏摧て薪と爲るを

更聞桑田變成海

更に聞く 桑田変て海と成るを

古人無復洛城東

古人 復洛城の東に無し

今人還對落花風

今人 還て對す落花の風

年年歲歲花相似

年年歲歲 花相ひ似たり、

歲歲年年人不同

歲歲年年 人同からず。

寄言全盛紅顔子

言を寄す 全盛の紅顔子

應憐半死白頭翁

応に憐むべし 半死の白頭翁。

此翁白頭眞可憐

此の翁 白頭眞に憐むべし

伊昔紅顔美少年

伊れ昔 紅顔の美少年

公子王孫芳樹下

公子王孫 芳樹の下

清歌妙舞落花前

清歌妙舞 落花の前

光祿池臺開錦繡

光祿 池台 錦繡を開き

將軍樓閣畫神仙

將軍 樓閣 神仙を画く

一朝臥病無相識

一朝病に臥し 相識る無し

三春行樂在誰邊

三春の行樂 誰か辺に在る

宛轉蛾眉能幾時

宛転たる蛾眉 能く幾時ぞ

須臾鶴髮亂如絲

須臾に 鶴髮乱て糸の如し

但看古來歌舞地

但看よ 古來歌舞の地

惟有黃昏鳥雀悲

惟 黃昏鳥雀の悲む有。⁽¹⁶⁾

この詩は、白髪頭になつてしまつた翁の気持ちに代わつて、若き劉廷之がその歎きを詠んだ作品である。大きく二段に分かれる。

華やかな花もいづれ散りゆく運命になり、若き男女も容貌が年々衰え、落花を見て嘆くようになる。松柏が切り碎かれ薪となつたり、桑畑が海に変わるほど時間の流れは速い。來年の花も果たして同じ仲間と愛でることができるだろうか。そんな中で、今を盛りの美男子に衰死しそうな白髪の人を憐れんでほしいと願う。

この老人も今や哀れな白髪であるが、昔は紅顔の美少年であった。高貴な一族の同世代の若者達と豪華な宴に参加し謳歌したが、突然の病で皆から見放され、見目麗しい姿は影もなく瞬く間に白髪に。しかも嘗て宴を催した会場は、ただ鳥たちが悲しげに囀っているだけと。

梨一は、もちろん注の中では、該当の二句だけを引用し、その「心ばえ」をと解説しているので、この詩情だけを踏まえて考えるべきであろう。そうすると、「草の戸も」の句には、紅顔の美少年や白頭翁などの歎きは直接は投影されず、時代の変化の速さ、特に人の移り変わりの激しさということのみで「人生の常なき観相」を読み取ることに過ぎなくなるであろう。ここでも断章取義が働いた引用と言うことになるが、ここでは予が自らを白髪の翁になぞらえて、若き夫婦やおひな様を喜ぶ娘に対し、さらにその先「住み替わる」時が来るかもしれないと予告していたとも取れるのではないだろうか。

以上、今回は尾形竹氏が言われた、いわゆる「大序」

の部分の五項目と「草の戸も」の句の計六項目を考察した。以下続く。

〔注〕

(1) 拙稿「おくのほそ道鈔」と漢詩文―その引用と解釈をめぐって―(拙著『芭蕉俳諧に表現された漢詩文の研究』おうふう平成三十一年所収)による。

(2) 梨一は、序文で、

我翁のことぐさに、東海道の一すじをも見ざらむは、風雅の情にうとからんとぞ。やつがれ、いと若きはじめより、此道をたしめ、あづまなる守黒庵主の軒下につかへて、いとまある折くには、おきなをつゞり置給へる文とものはしをも、問物し侍るに、師と我とは、いかなるすぐせありしにや、日ごろまめやかにをしへ導きたまひしを、はかなくも、其従事さえ十とせにだに満ずして、師は黄なる泉へ赴き給ふに、猶問もらせし事すくなからず。歎のうちになしび

をそへ侍るを、かくてやはと心をはげまして、ふた、び才ある人、心ゆく友どちなどに、しらぬ事かずく尋ね侍るうちにも、奥の細道の注解をと、ひたすらに心がけしかひやありて、幸なるかな、其折しもより、おほやけに仕て、おなかわたらひする事あまた、び、よそじの齢に至るほどに、翁の杖をひき給へる国く処々、大やうにかいめぐり、名どころ、ふる跡のくまぐくなどまのあたりに眺望して、猶さら翁の文章ほ句等の感慨まさり、いよく此抄の事心にわすれず、とかくする程に、我年もや、耳順べききはになりぬ。世の業もいとむつかしく、官を辞してこゝの丸岡にかくれしも、はや十とせあまりの露霜を経たれば、其注解もまた成ぬ。とあり、注解への想いとりわけ奥の細道ゆかりの各地を眺望しつつ、芭蕉翁の文章や発句への感慨の深さを述べている。そして、丸山に隠棲した宝暦十二年から、十年余りで、注釈が完成したことも記されている。

また、上巻が奪われた事件については、凡例で、

此書の上巻、先に草するものは、いにし年、越中富山の俳夫直生といふものに奪はれ、其後いろく手に手をつくして求むれども、とかく云て返さず。其うちに割鬪家の責、あまた、びに及ぶ。依てやむ事を得ず、子が心おほえのことぐさのみを、あらたに草して、其巻に充つ。故に其事いよくあらく、其文意つたなし。見ん人これをあはれめ。

と述べ、上巻執筆の苦勞を述べている。

(3) 『東洋文庫202近世崎人伝・続近世崎人伝』(平凡社 昭和五十一年)による。

(4) 『大阪青山短期大学所蔵本テキストシリーズ4 奥細道菅菰抄』(平成八年)による。以下同様。

(5) 以下の書を参考に漢籍の典拠を選出した。

○尾形仿編『芭蕉必携』別冊國文學(學燈社 昭和五十五年)

○仁枝忠『芭蕉に影響した漢詩文』(教育出版セクター 昭和四十七年)

○廣田二郎『芭蕉の藝術 その展開と背景』(有精堂 昭和四十三年)

○拙著『芭蕉俳諧に表現された漢詩文の研究』（お
うふう 平成三十一年）

(6) 久富哲雄・西村真砂子編『奥の細道古註集成2』
〔笠間書院 二〇〇一年〕による。以下附録は
同様。また古註については同書による。

(7) 「凡例」に、

此書の本文は、別に祖翁隨身の本を摸したる
印板あり。奥細道の本書は、本文素竜の筆、
外題は翁の筆跡にて、素竜・去來の跋あり。

とあり、梨一は『おくのほそ道』の版本（明和版
か）を利用していたことが窺える。

ただ、本文は全文を表記せず、該当箇所のみ断片
的に引用している。

(8) 宝暦五年刊による。

(9) 鄭清茂訳注『奥の細道 芭蕉之奥羽北陸行脚』

〔聯經出版 二〇一一年〕でも、

芭蕉之「過客」〔旅人〕則隱喻流動不居之時間。

と解されており、台湾でも『菅菰抄』の注が反映
されていることがわかる。

(10) 寛文五年刊『莊子虜窟口義』による。

(11) 寛文十三年刊による。

(12) 『和刻本正史 晉書（二）列伝中』（元禄十五年
刊 汲古書院 昭和四十六年）による。

(13) 同様の文が、『誹諧世説』「杉風無季の句を吟ず
る説」（蘭更 天明五年）に、

杉風は東武に産して、翁の東行をむかへかたの
ごとく志をつくしたる高弟なり。もとより翁の
古池や蛙飛こむ水の音 芭蕉

と名高き吟も、則ち杉風が別墅深川六間堀とい
ふ所の庵にての事にして、其古池猶今にのこり
て記念となりぬ。

とある。（『影印版 誹諧世説（全）』（文化書房博
文社 昭和五十四年）による）

(14) 『おくのほそ道評釈』の「発端の形式」の中では、
紀行全体の序に相当する一章だが、ありきたり
の紀行文形式では、下に見える「ことし、元禄
二とせにや……」といった叙述で始まるところ
を、その前にもう一つ序文的文言を加えている
ところに特色がある。いわば大序と言った部分
で、……ただ、それを単独に以下の叙述と遊離

した形で捉えるのではなしに、出発前の動静の記述の中に融かし込んでいるところに、一つの新しい手法上の発展がある。

と述べられており、「面八句……」までを以下の場面と融合させた大序とみなされている。一方、深沢眞二氏は「『おくのほそ道』発端考」(『連歌俳諧研究』第百三十七号 二〇一九年九月)の中で、中尾本や西村本などの字配りなどから、「面八句……」では切れず「見送るなるべし」までを一つのまとまりとして捉えるべき点を指摘されている。

序文に対してはさまざまな区切り方があるが、そのあたりを明確にしないところが『おくのほそ道』の特徴ともいえるのではないだろうか。

(15)

北村季吟『和漢朗詠集註』(寛文十一年刊)では、
言^{ロハ}花ノ色ハトシノニカハルコトナシ。人
ハ不^レ尔^{シカ}。コソミシ人ハナクナリテアラヌ人
ノミカハルトノ心ナリ。

と注解を施している。年々に変わらぬ花に対し、人間は昨年見かけた人が今年は姿が見えず別の人

に変わってしまったほど変化が激しい、まさに無常

であることを説いたのである。

(16) 宝暦十一年刊『唐詩選』による。